

「真なる哲学者」と謙虚さの徳

—ヒュームの哲学への復帰の徳認識論的解釈—

京都大学大学院文学研究科博士後期課程 小泉雄紀

0. はじめに

デイヴィッド・ヒュームの哲学的名著である『人間本性論』⁽¹⁾ 一巻の結論部「この巻の結論」(以下「結論」)は、わずか15パラグラフから成る比較的短い節であるが、ヒュームの哲学への絶望とそこからの復帰が全体として叙情的な調子で綴られた、ダイナミックな箇所である。そこで語られているのは、「全ての信念と推論に対する懐疑」という理性的な存在全てに投げかけられる問題であり、ヒュームはこの解決できない問題に際して一旦は膝を屈して哲学的探究をやめてしまうが、日常生活を営む中で自然と探究へと戻っていく。

ところが「結論」を読む我々はたちまち一つの疑問に立ち会うこととなる。ヒュームが懐疑という問題を解決していないのであれば、何故ヒュームはその後も哲学的探究を続けることができるのだろうか。仮に懐疑を忘れて探究を続けることができたとしても、再開された探究は再び懐疑へと迷い入ってしまうのではないか。ヒュームが「結論」の後に続ける情念論や道徳論といった探究は、何故懐疑に陥らずに遂行が可能だったのだろうか。理性に対して懐疑を行う一方で、理性を用いた哲学的探究を続けるというヒュームの立場を正確に捉えるためには、この問題に答えなければならない。

そこで本稿はヒュームの哲学に潜んだ「偽なる哲学」と「真なる哲学」の区別に着目し、「結論」が前者の失敗と後者への復帰を描いたものであることを明らかにする。その上で、真なる哲学への復帰とその遂行がある徳(virtue)によって可能であるという解釈を提示したい。

本稿は以下のように議論を進める。第1節では「結論」を三つの部分に分けて概観する。第2節では「結論」で描かれる二つの異なった「哲学」について論じる。第3節では偽なる哲学から真なる哲学への移行を説明するいくつかの解釈を取り上げ、それらが十全にこの移行を説明できないことを示す。第4節と第5節では、真なる哲学が謙虚さという徳によって可能となることを示し、いかにして謙虚さが得られるのかを解説することで、偽なる哲学から真なる哲学への移行がこの徳の獲得のプロセスであることを明らかに

する。

1. 「結論」の概観

「結論」は大まかに次の三つの部分に分けることが出来る。すなわち、(1) ヒュームがこれまでの探究を振り返り、いかなる信念もが他より確からしいと見なすことのできないものだという懐疑に落ち込む段階、(2) 懐疑による憂鬱から抜け出すために、自然本性に従うことでそれらの問題について考えるのを止め、社交に興じる段階、(3) 好奇心によって哲学的探究へと引き戻される段階、の三つである。本節ではこれらの段階を順に追うことで、「結論」全体の構造を概観する。

1.1 全面的懐疑と哲学的憂鬱

「結論」における議論の始点は、理性に対する懐疑である。ヒュームはこれまでの探究を振り返り、自身の推論に誤りがあるのではないかという恐れから次のような疑問を提起する。

私は全ての通説を捨てる際に、自分が真理に従っていると確信することができるであろうか。例え幸運にも私が真理の足跡を追っているとしても、私はいかなる基準によって真理を識別しようとするのか。 (T 1.4.7.3)

すなわちヒュームはここで、自らの探究一般が正しい（真である）ことはいかにして確信されるのかと問いかけている。

ヒュームによれば、ある推論に同意すべきである理由は、ただ経験と習慣という二つの原理が想像力に働きかけることで、特定の観念を他よりも「より強くより生き生きとした仕方で」抱かせるという事実しかない (T 1.4.7.3)。しかしこの原理に盲従することは誤謬へと繋がっている。例えば、我々が日常生活において「物体が存在する」という信念を抱くのはこの経験と習慣の働きによるのであるが、物体の存在自体は真であったとしても、それが誤った仕方で信じられているというのがヒュームの診断であった (T 1.4.2)。

ここでヒュームは「極めて危険なディレンマ」（以下「ディレンマ」）に直面する。一方で経験と習慣に働きかけられた想像力に従えば、それは誤謬への道である。ところが想像力による示唆を拒絶するならば、どのような信念も確立することが出来ない。「[...]」知性は単独で、その最も一般的な諸原理〔理性〕に従って働く時には、自らを完全に覆し、

哲学におけるものであれ日常生活におけるものであれ、いかなる命題にも最も低い程度の明証性さえ残さない」のである (T 1.4.7.7)。この「誤った推論を採るか、それとも推論を全くしないか」というディレンマに直面したヒュームは、何を信じればよいのかわからないという深い「哲学的な憂鬱と譫妄 (philosophical melancholy and delirium)」(以下「哲学的憂鬱」)の状態に陥る。

人間理性におけるこれらの多様な矛盾と不完全さを懸命に注視することが私に強く働きかけ、私の脳髓を熱したので、私は全ての信念と推論を拒否するのにやぶさかではなく、いかなる意見をも他のものより確からしいとかありそうであると見なすことさえできないのである。 (T 1.4.7.8)

ここで懐疑と拒絶が「全ての信念と推論」を対象としていることは注目に値する。この「哲学的憂鬱」は単にヒュームの哲学体系の一部における危機ではなく、その企て全体を左右しうる深刻な問題として捉えられている。

1.2 憂鬱からの脱却

理性自体への懐疑は、同じ理性によって解決することはできない。ヒュームをこの暗雲から救い出すのは、理性による推論ではなく人間の自然本性である。友人との食事、バックギャモン、会話、すなわち日常生活を楽しむ中で、この哲学的憂鬱は忘れ去られる。ヒュームはここで、哲学的憂鬱を生じさせた考察に対して無関心になることでひとまず問題を棚に上げていると言えよう。

しかし、ヒュームはそこからすぐに哲学的探究へと戻るのではない。日常生活を楽しむヒュームにとって、哲学的探究は「冷たく無理のある滑稽なもの」であり、再び探究を開始する動機が欠けている。

1.3 哲学への復帰

ヒュームを探究へと引き戻すのは、好奇心と野心である。「道徳的な善と悪の原理や、政府の本性と基礎、私を動かし支配する種々の情念と傾向の原因を知りたいという好奇心」、そして「人類の啓発に寄与し、自らの創意と発見によって名を挙げたいという野心」が自然と生じることで、ヒュームは哲学に快を見出すのである (T 1.4.7.12)。そしてその気分に従うことで、ヒュームは『人間本性論』二巻以降の哲学的考察へと進んでいく。

ただちに生じる疑問は、結局ヒュームは復帰した先で同様のディレンマに直面し、同じ懐疑のプロセスを繰り返さざるをえないのではないかというものである。ディレンマ自体が解決できていないのならば、ヒュームは再び懐疑によって哲学的憂鬱へと送り返されるのではないか。

この疑問に対する一つの答え方は、哲学的憂鬱の前後でヒュームの探究が—何らかの意味で—変化したとみなすことである。例えばアインズリーは、ヒュームを哲学的憂鬱へと導いた探究を「偽なる哲学」とみなし、これに対して復帰した後の探究は日常生活と調和する「真なる懐疑主義」⁽²⁾であると考えた (Ainslie, 2015, pp.237-242)。このようにヒュームの探究を二つの種類に分けることで、哲学的憂鬱以前の探究は懐疑によって失敗したが、以降の探究は異なった種類の探究であるが故に同じ失敗には終わらない—こうした説明が可能になる。次節では、この探究の変化というアイデアを擁護するための証拠をヒュームの記述から取り出して論じる。

2. 「偽なる哲学」と「真なる哲学」

ヒューム自身は「哲学」の二つの分類として、「偽なる哲学 (false philosophy)」と「真なる哲学 (true philosophy)」という区分を設けている。「結論」に先じる『人間本性論』一卷四部三節においてヒュームは、従来の哲学者たちが用いてきた「実体 (substance)」や「隠れた性質 (occult quality)」といった概念を指して、そのような対象が我々の経験の内に存在せず、また観察することができないと断じている。そしてこのような存在を恣意的に作り出して物事を説明する「哲学」が偽なる哲学であると言われる (T 1.4.3.9)。彼らは誤って実体のような存在を想定するだけでなく、そうした対象の諸性質を知ることができるとまで想定して様々な学説を打ち立てる。そのような探究は、単に主張する命題が偽であるという以上の意味で偽と断じられるのである。

他方で真なる哲学とは、こうした経験の内にない存在についての探究を含まないものだと語られる。真なる哲学の実践者である「真なる哲学者」は、「節度のある懐疑論 (moderate scepticism)」によってそうした探究に無関心になる (T 1.4.3.10)。しかし、この節度のある懐疑論の内実についてここでは語られない。

ヒュームが節度のある懐疑論と言うことで何を意味していたのかを明らかにするために、ここで後年の著作である『人間知性研究』に目を向けよう。ヒュームはそこで懐疑論の分類を試みており、その中には「緩和された懐疑論 (mitigated scepticism)」なる懐疑

論が含まれている (EHU 12)。この緩和された懐疑論こそが、節度のある懐疑論が名前を変えたものに他ならない。

『人間知性研究』における緩和された懐疑論には二つの主張が込められている。一つは知的探究の制限であり、もう一つは知的探究における独断的な精神の批判である。ここで着目したいのは主に前者であるが、これは悪しき形而上学の切り捨てを意味している。ヒュームは経験に基づかずに主張される学問を「偽りの不純な形而上学」 (EHU 1.12) と呼び、まさにそれが経験に基づかないという理由でこれを探究の対象から外している。経験に基づかない探究は、人間の能力を越えた主題なのである。

このことを踏まえれば、真なる哲学者が実体などの探究に無関心になるという事態は次のように説明される。すなわち、彼らは緩和された懐疑論＝節度のある懐疑論を実践することで、経験に基づかない探究を自身の探究の範囲から除外し、従ってそれらに無関心になるのである。

ここで、「結論」における哲学的憂鬱前後の探究が、それぞれ以上で確認した二種類の哲学であることを明らかにしておこう。第一に、哲学的憂鬱以前の探究、すなわち全面的な懐疑を行っている際の探究とは、探究者が自身の能力の限界を十分に自覚せずに行われる探究である。第1節で見たように、「結論」の議論は自らの探究が正しいとしかに確信されるのかという正当化の問題から始まっていた。この懐疑自体は理性という自身の能力への懐疑であるが、それが正当化されうるという懐疑の開始時の見立ては、この理性の限界を自覚していないがために立てられたものである。もし探究者が初めから理性の限界を知っており、正当化が達成されないとわかっていたならば、哲学的憂鬱などという状態に陥ることはなかったであろう。このような意味で、哲学的憂鬱以前の探究は偽なる哲学であると言える。

第二に、哲学的憂鬱以後の探究、すなわちヒュームが復帰した後の探究では、探究者 (ヒューム) は自身の能力の限界をよく知っている。再び探究を開始したヒュームが語る哲学とは、「可視的世界に現れる現象に対して、新しい原因や原理を帰することで満足する」ものであり、「最も安全で最も好ましい道案内」である。これに対して、「それ自らの世界を開き、全く新しい情景や存在者や対象を我々に提示する」営みは迷信として退けられる (T 1.4.7.13)。ここには実体や隠れた性質を想定し、それについて知ろうと苦闘する、偽なる哲学が含意されている。すなわち、ヒュームが復帰した「哲学」とは、緩和された懐疑によって探究の範囲を制限した真なる哲学なのである。

従ってひとまず次のように言うことができるだろう。すなわち、哲学的憂鬱の前後で、ヒュームの行っている哲学的探究は偽なる哲学から真なる哲学へと変化している、と。哲学的憂鬱の後で行われる探究は、対象を制限することで人間の能力に見合ったものとなっており、それ故ヒュームは再び哲学的憂鬱へと陥ることはない。何故なら、哲学的憂鬱とは偽なる哲学の帰結であり、真なる哲学ではそこに至る懐疑は生じないからである。

ここで我々は次なる問いに答えなければならない。それは、どのように偽なる哲学から真なる哲学への移行は可能なのかという問いである。

3. どのように移行は可能となったのか

この問いに答えるために本節では、いくつかのヒューム解釈上の立場から可能な答えを引き出し、それらを検討する。

3.1 自然な信念による解釈

ケンプ・スミスによればヒュームは、人間が自然な信念 (natural belief) を保持しているために、全ての信念を疑うような懐疑を免れる、という見解を持っていた。自然な信念とは、人間が本性的に持ち、理性によって正当化されることのない信念のことである (Kemp Smith, 1941, pp. 85–86)。例えば「物体は存在する」という信念は、これを否定する推論が可能であるものの、人間が本性的に抱かざるをえない自然な信念の一例である。この自然な信念という概念によって、二つの哲学間の移行は説明できるであろうか。

自然な信念に訴える解釈は、ヒュームが哲学的憂鬱を抜け出すという事態をうまく説明することができる。既に確認したように、ヒュームが哲学的憂鬱を脱するのは、人間本性に従い日常生活を送ることによってであった。ところが、何故ヒュームが真なる哲学を、すなわち緩和された懐疑を行うのかは、自然な信念だけでは説明することができない。というのも、真なる哲学で採用される緩和された懐疑がなんらかの信念に基づくとしても、それは人間に本性的な自然な信念ではないからである³⁾。自然な信念を持つことで過剰な懐疑を避けることができるとしても、そこから直ちに緩和された懐疑を探究の規範とすることはできないように思われる。

3.2 懐疑主義解釈

自然な信念による解釈とは異なり、ヒュームの哲学への復帰に全面的懐疑とその帰結としての哲学的憂鬱が影響しているとみなす解釈を、哲学への復帰に関する懐疑主義解釈と呼ぶことができるだろう。例えばフォグランは、ヒュームの最終的な立場 (真なる哲学

者)が、ディレンマと憂鬱が理性によって解決しないという事実を忘れないようにする立場であると考え、ヒュームが自らをあくまで懐疑論者と呼ぶ理由がここにあるとする (Fogelin, 1993)。あるいはブロートン¹は、哲学的憂鬱のもたらす自身の理性の不十分さへの自覚が、以降の探究をあくまで不確実なものであると突き放して見るような皮肉な営みとするのだというより悲観的な解釈を提出している (Broughton, 2004)。

ここから、哲学的憂鬱の経験が、その後の探究における規則をヒュームに与えたという考え方ができるかもしれない。しかし、懐疑と哲学的憂鬱が偽なる哲学から真なる哲学への移行に影響を与えているとしても、その影響の仕方については考察の余地がある。偽なる哲学の実践が失敗に終わったという経験がヒュームをして緩和された懐疑をさせていると考えた時、この経験と新たな実践の間に理性による推論を挟むことはできない。哲学的憂鬱の状態にあるヒュームは、今まさに全ての推論と信念に対して懐疑を行っているのであるから、「緩和された懐疑に基づいて探究を行う」といった規則を推論によって正当化することはできない。このような規則があるのならば、それは理性によらずに自然と探究者が抱くものでなければならない。

3.3. 「資格原理」説

ギャレットは、真なる哲学を行うヒュームが資格原理 (title principle) と呼ばれる規範に則って探究を行うという解釈を打ち出した。資格原理とは、ヒュームが哲学的憂鬱の後に述べる次の記述を指している。

理性が生き生きとしており、何らかの傾向と共存する場合には、理性に同意しなければならない。そうでない場合には、理性は我々に働きかけるどんな資格をも持つことができないのである。 (T 1.4.7.11)

理性に対する懐疑を行う理性はこの規範に照らして資格を持たないとみなされる。従ってギャレットの資格原理説によれば、ヒュームはこの規範に則ることで理性に対する懐疑を回避し、それを含まない探究を続けることができる (Garrett, 1997, pp.234–235)。

ヒュームが結果的に資格原理に従っているように見えるという点で、この資格原理説は説得力を持つ。しかし問題となるのは、この規範がどうやって導き出されたかである。既に述べたように、哲学的憂鬱の後では全ての推論が懐疑を免れえない。そして資格原理は人間本性から自然に生じるものではない。資格原理はヒュームが復帰した後の哲学につい

て我々に教えてくれるが、この規範を持つ以前にヒュームは懐疑を退けなくてはならないのである。

4. 真なる哲学者と徳

それでは何故ヒュームは偽なる哲学から真なる哲学へと移行することができたのだろうか。この問題に答えるために、本稿では徳という概念を導入したい。

ここで真なる哲学について確認しておこう。真なる哲学、ないし真なる哲学者であることの内実とは、緩和された懐疑を行うということであった。そして緩和された懐疑の実践とは、自身の能力に合わせて探究を制限することと、独断的にある信念に盲従することの批判とである。この両者はどちらも、自身の能力の弱さを正しく把握することに付随した事柄である。我々は自身の能力（理性や想像力）の限界を把握することで探究の主題を制限し、その不十分さを自覚しているために、信念への盲従を避ける。このような自身の弱さを把握した人の性質を、ヒュームは謙虚さ (modesty) と呼ぶ (T 3.3.2.1)。

謙虚さとは徳の一つであり、通常は道徳の文脈で語られる言葉である。実際にヒュームが謙虚さを含めた徳について語るのは、同じ『人間本性論』でも第三巻であり、現在扱っている第一巻の範疇には属していない。しかしヒュームの体系における徳とは、決して狭い意味での道徳に属する言葉ではない。

ヒュームにとって徳とは、第一に精神の性質のことである。我々はある行為に対して「この行為は有徳である」という表現を用いることがあるが、ヒュームによればそれらの行為は、その行為を可能としている精神の性質の標であり、行為自体が徳を持っているのではない (T 3.3.1.4)。そして精神の性質の内、その性質を持つ当人か、あるいは他の人々にとって、快をもたらすか有用であるような性質が特に徳と呼ばれる（この反対が悪徳である）。この基準から、ヒュームの想定する徳が非常に広い範囲の対象を指すことが読み取れる。例えばヒュームは勤勉さ (industry) や忍耐 (perseverance) といった性質の他にも、清潔さ (cleanliness) ですら徳のリストに含んでいる (T 3.3.4.7, 10)。従って、真なる哲学者が持つ云々の性質を徳と呼ぶことに困難は生じない。そして真なる哲学者の謙虚さは、少なくとも真なる哲学者自身にとって、哲学的憂鬱という苦を回避させる点でも有用でもある。

真なる哲学者の性質を徳とみなすことの利点は、そのことによって、理性による推論を媒介しない形で再開された探究の規範を説明できることにある。前節で確認したように、

全面的懐疑を行っているヒュームがある種の推論によって新たな探究の規範を得ることは不可能であった。次節では、「結論」でヒュームの辿るプロセスの中でいかにして謙虚さという徳が得られるのかを示し、このことをより詳しく確認したい。

5. いかにして謙虚さを身につけるか

ヒュームは謙虚さという徳について、誇り (pride) と卑下 (humility) という二つの情念を用いて記述している。謙虚さとはこの二つの情念が「正しく釣り合っている」状態を指し、逆に誇りが卑下に対して過剰である状態はうぬぼれ (conceit) という悪徳であるとされる (T 3.3.2.1)。それ故、真なる哲学へと至る道筋にはこの誇りと卑下の情念が生じていると予測される。以下ではこの二つの情念がどのように生じてくるのかを確認しよう。

過剰な誇りはうぬぼれへと繋がるものの、ヒュームは誇りそれ自体に対して好意的である。「生きていく上で、しかるべき度合いの誇り以上に我々にとって有用なものはないと確実に言える」 (T 3.3.2.8) とヒュームが言う時、誇りはそれ自体価値があるものとみなされている。重要なのは誇りが「しかるべき度合い」であること、すなわち卑下とのバランスが問題なのである。

さて、それでは真なる哲学へと移行する以前の哲学、つまり偽なる哲学において、誇りはどのように生じているだろうか。偽なる哲学の例として、「隠れた性質」である因果性の想定についての記述を参照しよう。偽なる哲学者が対象の内に因果性を想定するのは、そのことによって原因と結果の結びつきを説明しようという意図があるからである。ここでのポイントは、それが誤りであるにも関わらず、我々には知覚できない因果性の存在によって原因と結果の結びつきを説明することが、偽なる哲学者にとって問題を解決したという満足感を与えるということである (T 1.4.3.10)。この因果性の想定という場合には想像力が過剰に働いているのであり、偽なる哲学者たちは自身の能力である想像力の示唆に盲従しながらも、その結果から誇りを得ている。

同様に、知覚像と知覚から独立した対象の関係についても偽なる哲学者は自身の能力による問題の解決から誇りを得ている。この場合には、我々が得る知覚が刻一刻と変化するのに対してその対象は同じ一つの対象であり続けるという事態の説明として、知覚と対象の二重存在説 (double existence theory) が主張されるが、これは理性によって導き出される学説である (T 1.4.2.52)。因果性の場合と同じく、偽なる哲学者は自身の能力による問題の解決を経験し、そこから誇りを得るのである。

このように偽なる哲学者はその諸々の探究において想像力や理性といった自身の能力に誇りを抱く。そしてこの誇りの情念は、「結論」で示されたディレンマと哲学的憂鬱に遭遇するまで維持されるのである。

卑下の源泉はこの「結論」におけるディレンマと哲学的憂鬱にある。想像力への盲従は誤りへとつながり、理性のみを用いることではいかなる信念も確立できない。こうして陥った哲学的憂鬱は、これまで誇りを生み出してきた自身の能力の非力さを感じさせ、ここにそれらの能力を原因とした卑下の情念が生じる。

こうして誇りと卑下という二つの情念が出揃ったことになる。この二つの情念はこうして釣り合い、探究者は謙虚さの徳を獲得する。従って、哲学的憂鬱に陥った探究者は今や、自身の能力の限界を自覚した真なる哲学者となっている。

この情念の発生と徳の獲得の道筋を眺めると、そこには理性による推論が介在していないことがわかるだろう。誇りと卑下はどちらも情念として感じられるものであり、推論によって探究者が抱く観念ではない。そしてそれらが釣り合った結果としての謙虚さもまた、二つの情念の存在から推論で導かれたものではない。これらは全て理性の外部で起こる出来事であって、それ故全面的懐疑と無関係に起こりうる。偽なる哲学から真なる哲学への移行はこうした謙虚さの獲得プロセスなのであり、真なる哲学は理性が介在せずに獲得された謙虚さのある種の規範的態度として遂行されるのである。

6. 結論

本稿は、ヒュームの「結論」における哲学的憂鬱から哲学への復帰を、偽なる哲学から真なる哲学への移行と位置づけ、この移行を情念の発生と徳の獲得によって説明する解釈を提出した。

アインズリーはその著書の中で、「結論」を指して、「英語で書かれた哲学的正典 (canon) の中で最も文学的であると思われる」と述べた (Ainslie, 2015, p.218)。このような「結論」の見かけに対する評価は、我々がそこにヒュームの困惑と嘆息を交えた独白や、バックギャモンに興じ散歩をするヒュームの姿を見出す時、確かに正しいように思われる。ヒュームの「結論」は多分にヒュームの個人的な事情という色彩をまとっている。しかしこれまで見てきたように、「結論」が提示しているのは、ヒュームという一個人の事情に留まらない人間一般の理性に関する問題であり、そしてそれを受けた行われるべき探究——真なる哲学——の方法論なのである⁽⁴⁾。本稿が示したようにその探究が謙虚さとい

う徳を必要とするのであれば、ヒュームのこの主張とは、優れた探究とは徳に基づいて行われる探究であるという、徳による探究の制限ないし制御の提案と言える。

本稿が見るところ、ここには分析的認識論 (analytic epistemology) に対してロバーツとウッドが主張する、制御的認識論 (regulative epistemology) としての徳認識論が展開されている (Roberts & Wood, 2007, pp.20–23)⁽⁵⁾。繰り返すが、ヒュームは探究を徳によって制限し、それによってこそあるべき探究が実現されると考えていた。ヒュームが「結論」でそこへ至る過程を記述した真なる哲学とは、ある種の制御的徳認識論によって提示される探究のあり方であると言えよう。本稿はこのことを指摘するものである。

註

- (1) 以降、ヒュームの著作からの引用は慣習に従い、略字を用いて引用箇所を示す。なお訳については、『人間本性論』は木曾訳 (デイヴィッド・ヒューム(1995).『人間本性論 第一巻——知性について』, 木曾好能訳, 法政大学出版局.) ならびに石川訳 (デイヴィッド・ヒューム(2012).『人間本性論 第三巻——道徳について』, 石川徹他訳, 法政大学出版局.) を参照し、『人間知性研究』は神野訳 (デイヴィッド・ヒューム(2018).『人間知性研究』, 神野慧一郎他訳, 京都大学学術出版会.) を参照したが、適宜訳語を変更した箇所がある。
- (2) アインズリーの言うところの「真なる懐疑主義 (true scepticism)」は、本稿が「真なる哲学」と呼ぶ、ヒュームが再開した哲学を指す。
- (3) 確かにヒュームは、緩和された懐疑を行う真なる哲学者が、日常的な生活を送っている人間 (普通人 (the vulgar) と呼ばれる) に似ていると述べている (T 1.4.3.9)。しかし普通人と真なる哲学者はあくまで別のものとされている。両者は共に偽なる哲学が主題とするような探究に対して無関心であるが、前者が探究一般への志向性を欠いているために無関心であるのに対し、後者は自身の能力の限界を知るが故に無関心なのである。従って、自然な信念に従うだけでは普通人になることはできても真なる哲学者になることはできない。
- (4) ヒュームは真なる哲学が必ずしも真理を得られるとは考えていなかった (T 1.4.7.14)。ヒュームは真なる哲学を推奨することで、探究者が少なくとも誤った道へと進まないようにと警告を発しているのである。「私にとって唯一の望みは、いくつかの点で哲学者達の思弁の向きを変えさせ、そこでのみ確信を得ることが期待できるような問題を哲学者達に

よりはっきりと示すことによって、知識の進歩に多少の貢献をしたいということである」(T 1.4.7.14)とヒュームが言うように、これこそが『人間本性論』を記したヒュームの意図であった。

(5) この認識論の分類自体のオリジナルは (Wolterstorff, 1996)。前者が知識や正当化などといった概念についての理論を提供し、またこれらを定義づけることを目的とするのに対して、後者はいかに知性を用いるべきか、どのような手段で信念を形成するべきかの手引を与えることを目的とするものとされる。

文献

- Hume, D. (2000). *A Treatise of Human Nature: Being an Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning Into Moral Subjects*, David Fate Norton & Mary J. Norton (eds.), New York: Oxford University Press.
- (2000). *An Enquiry Concerning Human Understanding*, Tom L. Beauchamp (ed.), New York: Oxford University Press.
- Ainslie, D. C. (2015). *Hume's True Scepticism*, New York: Oxford University Press.
- Broughton, J. (2004). 'The Inquiry in Hume's Treatise,' *The Philosophical Review*, Volume 113, Number 4: 537–556.
- Fogelin, R. J. (1993). 'Hume's skepticism,' in David Fate Norton (ed.), *The Cambridge Companion to Hume*, New York: Cambridge University Press, 90–116.
- Garrett, D. (1997). *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, New York: Oxford University Press.
- Kemp Smith, N. (1941). *The Philosophy of David Hume: A Critical Study of Its Origins and Central Doctrines*, London: Macmillan.
- Roberts, R. C., W. Jay Wood. (2007). *Intellectual Virtues: An Essay in Regulative Epistemology*, Oxford: Oxford University Press.
- Wolterstorff, N. (1996). *John Locke and the Ethics of Belief*, Cambridge: Cambridge University Press.